

第22回スタディツアー

(2023. 1. 31～2. 15)

2週間の日程の長さに気おくれして、行きたくないモードが続いていた。言葉もしゃべれずに居心地が悪い日が長く続く。

〈おこがましい〉

マイナス思考であれこれ思いめぐらせて、「年に2回、10日間ほど訪問するだけで、あれこれワンドロップ小学校の先生がどうやこうや言うのはおこがましい…!」とつぶやいていたら、嫁さんが「いや、大西さんらは自分の作った学校のことを本気でいい学校にしようと思って全力で取り組んでおられるから素晴らしいことだと思う」と言う。今回行って見て、「おこがましい」のはぼくのこと、大西さんらにとっては学校を良くしたいという気持ちがあつてのことだと納得した。



ぼくは、ワンドロップ小学校の先生らと話ができないし、タリクさんと大西さんが学校運営に関する議論しているときも、そばにいて聞いているだけで話に入れない。

カリキュラムを組むとき浅田さんは、それぞれの先生のことがよく分かったうえで時間割りを組んでいく。ぼくは、先生たちの教え方、指導力、人柄などについて、何もわからない。

子どもたちの写真を撮るために教室に入って先生の授業を見るけど、先生らの授業がどうなのか、ほとんど意識していなかった。大きな声で復唱する子どもたちの声が教室中に響き渡るのが元気がいいなあ、と感じているぐらいだった。

今回、恥ずかしながらちょっとだけ、先生らの授業のことを考えた。いつもオウム返しに大声で復唱するだけの授業ではだめ、もっと工夫があってもいい。黒板の板書の字が小さすぎて、わかりにくい。生徒のノートのとり方も乱雑。授業で子どもたちと楽しく会話をしたり、本を読んで感想を子どもたちと話し合ったり、子どもたちの日常生活のあれこれを聞いてやったりする、そんな授業もできないかなあ。

そんなふうを意識してみると、あれこれ言うのは「おこがましい」ことではなくて、ワンドロップ小学校の学校生活をより良いものにしていくためのサジェスションだということなのですね。(しゃべらず、議論も苦手、深く考えることもしないぼくが、これからも提言することはあまりないとは思いますが)

〈気恥ずかしい〉

大西さんが、「ワンドロップ小学校が目指すもの」を提起した。

〔よりよい大人は〕

1. 相手のことを考える人
2. 誰かを助けることが喜びと思える人
3. 自分の意見を持って自ら進んで行動する人
4. 将来に夢や希望を持ってそれを実現するために努力する人
5. 健康で意思が強い人

これを見せてもらって、どう思うか聞かれた。とてもいいけど、ぼくには気恥しくて何とも言えない。最近のぼくは、日本で働くベトナム人の生活についてはよく考えて、助けてあげることが喜びとなっている（嫁さんからは「ベトナム人のことばかり。私のことや息子や孫たちのことは全然考えない！」とぼやかれているが）。ぼくは健康だけど意思は弱い。自分の意見は持っているつもりだが、進んで行動はできない。将来の夢や希望はもう見る年でもないし、実現のために努力するパワーもない。

お世辞ではなくて、これを日々実践している大西さんが言うから説得力があるのだ。

〔生徒のみなさんへ〕

1. 時間を守る
2. 感謝の気持ちを伝える。まず、「ありがとう」から
3. 自分を清潔にする
4. 教室、学校、持ち物を大切に扱う
5. 友だちを大切に。助け合う。教え合う。注意し合う



大西さんから「ワンドロップ小学校が目指すもの」を見せてもらって、ぼくは気恥ずかしくなくなった。こんなのを掲げてスタディツアーに行くのは気後れがして、行きたくないモードからモチベーションを上げることはできなかった。

でも、これも今回のスタディツアーに行ってみて、なるほどこれらの項目はきれいごとではなくて、具体的で実現可能な実践目標なのだということをちょっとだけ実感することができた。（しゃべらないぼくには、先生や子どもたちと、この目標に向けて一緒に取り組むことができないことだけだ）

「時間を守る」

授業時間の初めと終わりがあいまいで、何となく始まって、いつ終わったかもわからないまま、次の授業の先生が教室に来ている。チャイムを鳴らし、5分の休み時間はトイレ、教室移動に役立てる。

「ありがとう」

ランチのとき、カレーをよそってもらったら「ありがとう」を言う。順番を待つときは整列して待つ。みんなが席に着いてから「いただきます」で食べる。

「清潔」

子どもたちの日々の暮らしで服を洗濯したりすることもできないだろう。制服も着たきりで泥んこ。でも、たとえば、サンダルは教室に入る前に廊下で脱いできれいに並べる。トイレに入るときはトイレ用のサンダルを履く。手洗いを励行する。ゴミは窓から捨てないでゴミカゴに入れる。こんなことを習慣づければいいですね。

「助け合う、教え合う、注意し合う」

子どもにこんなお題目を言ってもわからない。普段の学校生活の場面ばめんで、先生も先生どうし、生徒に対しても、こんな時どうすることがお互いを大切にすることになるのかを気にかけて行動するようにしたいですね。運動会の予行練習で、「われ先に！」「リレーでズルをする」「ルール無視」。むちゃくちゃだったけど、本番になったら練習の成果が出て、見ちがえるほど上手になっていた。日々の学校生活の積み重ねで成長していくのですね。

ぼくは「おこがましい」とか「気恥ずかしい」とか言って逃げ腰ですが、大西さんは、ワンドロップ小学校の学校運営、先生のサラリー、ランチ代などの予算、教職員、教科指導、教育目標など、すべてのことに対して責任を取らなければならない立場で頑張っている。わかっていたつもりだったが、今回、そのことが改めてよくわかった。

〈おんぶに抱っこ〉

スタディツアーに行きたくない。ぼく一人ではチケットも買えない、飛行機にも乗れない。外国への入国手続きもできない。何から何まで手取り足取り、おんぶに抱っこ。



「大西さんがいないとスタディツアーに行くのは無理！」と言うぼくに、「誰かがコロナに感染したら、その人と私はバングラデシュに残る。私がコロナにかかったら一人で残って皆さんは日本へ帰る。一人だけには決してしません」と大西さんは言って安心させてくれる。ぼくは気楽に考えてすべて任せていた。

しかし、スタディツアーのすべてにわたってリーダーとしての責任を持つという大西さんの覚悟の重さを今回のツアーで実感した。スタディツアーでは、参加者はそれぞれが自分の行動は自分で責任をとるという暗黙の約束があるが、スタディツアーに対して個人は、それぞれが責任を自覚して行動しなければならない。注意していてもコロナに感染することはあるし、不可抗力で事故が起こることはあるとしても、個人はスタディツアーに迷惑をかけることはしてはならない。

バングラデシュに行くには、英文のワクチン証明がなければならないということだったが、一人が日本語の接種証明しか持っていなかった。関空でマレーシア航空に乗る際、クアラルンプールまでは搭乗することを認めてもらえたが、その先、クアラルンプールの空港でPCR検査を受けて陰性が証明されなければダッカへの搭乗はできないことになった。いったん空港を出た所でPCR検査を受ける手続きなど大西さんがいなければできないこと。また、もし仮に陽性になったら彼女一人を日本に帰らせてもいいのか。スタディツアーでは、メンバーを一人だけにはしないということだったら、陰性になるまで大西さんが彼女に付くのか。

幸い、陰性結果が出たので良かったが、結果がトランジットの時間に間に合わなかったらどうなったか。残りのメンバーだけでダッカへ着いたとしても、そのあとの行動は大西さんがいなければ、とてもできることではない。

ツアーのすべてにわたって、大西さんに責任を負わせていることに気づかされた。

すべてお任せのぼくが言うのもおこがましいが、ツアーに参加する場合、準備は抜かりなくし、ツアー中は、常にタリクさんらの固いガードで危険を回避してもらっていることを自覚して、行動は慎重にしなければならないと感じている。

〈サンタクロース〉

貧しい人々への慈善事業というのはだめだと思っている。私たちのスタディツアーは、慈善事業ではない。私たちも、彼らとともに、少しでも明るく楽しい暮らし、生き方ができるよう、そのための具体的な取り組みをしているのだと、今回少し気づくことができた。



しかし、ぼくにとってのスタディツアーはやっぱり「サンタクロース」ですね。言葉のわからぬ遠い国から優しそうで親切そうな笑顔を見せて、プレゼントを運んでしてくれる人。ちょっと楽しい遊びをして、写真を撮ってくれる人。ぼくは、子どもたちや先生らと言葉を交わし、心情を理解して、お互いに向上していく取り組みはできない。でも、サンタクロースでもいい。

久しぶりの対面でも、「ヤマナカ！」と名前を憶えてくれる子がいる。「ヤマナカさん！」と、村の道での通りすがりに声をかけてくれる卒業生がいる。「セルフイー（自撮り？）！」と、写真を撮ってくれとしつこく言い寄ってくる憎たらしい子どもがいる。病院で生まれて、お金で買われてきたという4歳の小学一年生。日本の子どもたちと比べて、背が低く、やせ細っているけど、ぼくらには満面の笑顔で迎えてくれる子らがいる。

生徒の名前を全部覚えて、生徒の顔とその子の声が聞き分けられるようにしたい、と熱い思いで言う岡さんのようににはできず、誰がだれやらわからないけど、彼らには貧しくても元気でいて欲しい。卒業しても上の学校に行けない、いい仕事にも就けない、としてもこの学校にいる間は明るく楽しく過ごせて、そのことが将来にわたっていい思い出となり、励ましになってくれたらいい。そんな彼らを見守れたらなあ、と思っている。

(山中 勇)